

## “We-mode認知”に関する時間学的考察 長嶋洋一（静岡文化芸術大学）

心理学/認知科学の領域で注目されている「We-mode認知」とは、スタートとなった Gallotti/Frithの論文[1]が2013年、日本で唯一の心理学レビュー誌「心理学評論」（1957年創刊）での「We-mode認知」特集（関連論文15本）[2]は2016年、ハードカバーの専門書として日本語で初解説した書籍[3]は2019年、という新しい概念である。過去の心理学は主として一人の人間に注目して分析してきた。最近では2人など相手のいる「共同行動」や多数の「社会行動」の心理学も注目されているが、「We-mode」とはそれらとも異なる。別の人間と共同で行う行為に関して、脳内に「我々」という融合した意識が生じるモードであり、共同行動がもたらす自己実現や創発などの新しい可能性が期待されている。

筆者はバイオフィードバック・リハビリテーションの専門家との共同研究において、メディアデザインの応用としてウェルネス・エンタテインメントの可能性を探求している[4]が、その関連調査の中で、2021年の第21回認知神経リハビリテーション学会大会において、「We-mode Cognition ---新たな運動学習の視点と臨床展開をめぐって---」という注目すべき特集[5]と出会った。用語としての「We-mode」は知られていなかったものの、この分野の作業療法士/理学療法士/医師/介護士にとって、「介入」の現場で多くの具体的な実績としての成果が積み重ね続けられていたのである。そして筆者のテーマ「ウェルネス・エンタテインメント」の視点から見ても、自己を意識する脳領域（感覚/運動野）と、相手の追跡/情動を追いかける脳領域（ミラーニューロン）とが異なる部分にあることから、脳内の異なる領域を活性化させることで脳機能リハビリテーションや認知症予防に関して非常に有効であると期待している。

これまでインタラクティブな体験による「知覚と運動」のインタラクションの効果、そしてマルチメディア/マルチモーダルなシステムデザインによる複数の知覚チャンネルの同時駆動、などに注目してきたが、ここで新たに「We-mode認知」という視点を得てみると、新しいアプローチの可能性が拓けてきた。進化生物学的には人間の進化の原理が「効率化」・「省エネ化」にあることから、古典的な心理学のモデルよりも「We-mode認知」モデルによってより高速で低負担の脳内処理を行うように進化したという仮説の検証と共に、時間的なアプローチでの研究を発展させていきたい。

### 参考文献

- [1] Gallotti, M. and Frith, C. (2013), Social cognition in the we-mode. [https://www.researchgate.net/publication/236053731\\_Social\\_cognition\\_in\\_the\\_we-mode](https://www.researchgate.net/publication/236053731_Social_cognition_in_the_we-mode)
- [2] 心理学評論, 2016, 59巻, 3号. [https://www.jstage.jst.go.jp/browse/sjpr/59/3/\\_contents/-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/browse/sjpr/59/3/_contents/-char/ja)
- [3] 嶋田総太郎. 脳のなかの自己と他者 ---身体性・社会性の認知脳科学と哲学---. 日本認知科学会編「越境する認知科学 1」, 共立出版, 2019.
- [4] 長嶋洋一. ウェルネス・エンターテインメントを実現するメディアアート. 京都市立芸術大学美術研究科(メディアアート) 博士(後期) 課程 博士論文, 2019.
- [5] 第21回認知神経リハビリテーション学会学術集会講演論文集, 2021.